「夢の関東」への萌芽

武則知義

VOL. 7

2025秋～2026春

関東私立高等学校選抜大会　3/19@神奈川県小田原アリーナ

男子　初戦辛勝　課題は初戦の立ち上がりか

▲チーム西武台の選手・マネージャー・保護者・OB・監督

春分の日。小田原に全国の私立高校が集まった。チーム西武台男女とも万全を期して挑んだ。

男子初戦、東京都武蔵野大学高校。相手と自分達を比べ勝利を予期した者もいたように見えた。しかし裏腹に一本が遠い。大将小澤の二本勝ちで2回戦進出もどうも冴えない。2回戦は今年のIHチャンピオン静岡磐田東高校。差がつき敗北こそしたが、初戦の方が課題が残る悔しい結果だった。

女子初戦、神奈川光明相模原高校。夏、年明け快勝。2月は決着つかず引き分けばかり。何度も戦い、手堅さが出た光明相模原に西武台は苦戦が予想された。先鋒福井が切り込むが勝負をかけた一本で竹刀を落とす。次鋒山城も思い切った抜き面で場外。リズムに乗れない。ダメかと思ったその時に山城の片手面が決まった。文句のない一本だった。その後中堅小谷田、副将猪ノ口が引き分けで繋ぎ大将遠藤。しかし、相手は長身の大将黒澤、遠藤が後ろに捌くも上から面を打たれた。代表戦、これまで代表戦はほとんど遠藤だった。しかし監督青山はもし光明相模原と代表戦になったら練習試合で対戦が多い遠藤ではなく福井で行くと伝えていた。福井の慣れない代表戦。しかし福井の腹は決まっていた。「これまでりさに負担を掛けてきた。今日くらい私で決めてやる。」代表戦は時間内で決まらず、延長へ。光明相模原黒澤の小手が福井に襲いかかる。紙一重で決まらず時間が過ぎる。延長に入り、黒澤が無理に間合いに入る。そこで福井の諸手の面が黒澤の面を捉えた。3本の旗が同時に上がる。文句なし。初戦を突破し、福井と遠藤が涙ぐむ。見事な勝利だった。2回戦は愛知の星城高校の0-3で敗北したが、大きな成果のあった1日だった。

コラム

今回拓高旗と関東私学に喜々津先輩が帯同してくれた。「自分の後輩がこれだけ頑張ってるのを見て、とても興奮して楽しかったです。また剣道をやりたくなりました。」そうコメントしてくれた喜々津先輩。また都立駒場にコーチとしてきてくれた田中先輩。OBの先輩方本当にありがとうございました。

▲片手面を決める山城凛奈（2年:さいたま市南浦和中）

▲代表戦に勝利する福井萌夏（3年:川口市芝東中）

男子　拓高旗4回戦進出(ベスト16)3/30@府中の森体育館 東海大菅生（東京）に大将戦を制す!!

▲大将戦に勝利する小澤弥真斗（3年:所沢東中）

東京で全国と戦うことを決めた男子は3日間都立駒場で錬成会に参加した。結果は快勝ばかり。田中先輩をコーチにつけた2日間で思い切ったオーダーの変更を試みた。秋田の青山と連絡を取りながら臨んだ3日間で手ごたえをつかみ、青山不在の中，地力と男子の成長を見せた。拓高旗本戦、OB喜々津先輩（令和五年卒）の審判協力があって参加出来たことに感謝した。初戦都立鷺宮（東京）、先鋒不戦勝、次鋒引き分け、中堅秋葉が面を先取し一本勝ち。副大も引き分けて初戦突破。2回戦はオーダーを変え、先鋒から多田、秋葉、上村、見澤、小澤。相手は大和南（神奈川）、実は早大剣道部出身監督対決。先鋒多田、チームの顔として果敢に攻め、面と小手で二本勝ち。新一年入る春に確かな存在感を示した。続く次鋒秋葉が一本負けするも中堅上村が面で一本勝ち。相手に傾きかけた流れを引き戻した。リードで回す前衛の働きを守り勝利。3回戦東海大菅生（東京）、強豪だ。しかしチームは勝ち上がる度に気持ちが一つになっていった。先鋒多田引き分け、次鋒秋葉が先制されるも面を二本返し、リードで回す。中堅上村が攻めながらも冷静な試合運びで引き分ける。副将見澤、得意の諸手突きを決めるも二本打たれ、チームは同点。見澤は悔しさをにじませた。チームの勝敗は主将の双肩に委ねられた。選抜予選に始まり、嬉しい経験よりも悔しい経験の方が多かった小澤。心は経験で強くなる。試合時間2分で得意の引き胴が響く。直後その胴が効いたか、相手が安易な面に飛び込んだのを逃さず抜き面で先制。その後落ち着いて捌き、出鼻面で二本勝ち。その後会津工業（福島）に敗北したが、試合後秋田に電話した小澤の言葉で青山が涙ぐんだことが印象的であった。

▲チーム西武台の集合写真

女子　九州の強豪筑紫台（福岡）に善戦!! 3/30 @秋田県立武道館

チーム西武台は秋田に向かった。IHに並ぶ高校五大大会の一つの魁星旗争奪全国高校女子剣道大会に今年初挑戦した。正直秋田まで行っても初戦負けで終わる可能性もあった。「それでも行きたいから連れてって欲しい」彼女たちの目は光っていた。トーナメントが発表された。初戦は筑紫台（福岡）全国優勝6回、日本代表を輩出している強豪だった。ついに試合の時が来た。隣のコートでは島原（長崎）共愛学園（群馬）桐蔭学園（神奈川）全国の強豪ばかりだが物怖じはしなかった。先鋒小谷田、相手は上段だった。出鼻面、返し面、相小手面と多彩な技で試合を有利に進める。結果は引き分け。次鋒は不戦敗。中堅山城、相手が何度もグングン入って圧力をかけてきた。しかし山城は手を下ろさなかった。おそらく下ろしていたら返し面を打たれていただろう。目立たないが山城の隠れた好プレーだった。一本を取る以外にもチームに貢献する方法はある。結果は引き分けだった。本当は一本取りたかったことは周りが1番わかっていた。副将福井、先鋒から副将に変わり、チームのスコアを決めにかかるポジション。理紗の負担を減らす、いや理紗と一緒にチームの勝敗を背負うと決心し始めた。理紗の戦う相手はいつも化け物級。だからこそ自分の試合で理紗に力を与えたい。そんな思いが見える試合だった。終盤に片手面が相手の面金に降りかかるが旗が上がらず引き分け。大将遠藤、2本勝ち必須。攻める。筑紫台大将阿比留。とにかくでかい。圧力も迫力もあった。しかし遠藤には神速がある。引き分け狙う相手に、鋭く先をかける足攻めが光る。とにかくはやい。しかし直後に長身の相手の首狩りが簡単に通る。身長差が悔しい。攻め続けるが時間切れ。負けずに負けた試合だった。悔しさと成果があった。試合後剣道王国九州の八代白百合、中村学園等の剣道を見て目を光らせながら帰路についた。